

「誤った戦後国家のスタート『主権回復の日』(4・28)を今こそ問う—沖縄・安保・天皇制の視点から」集會への結集を!

天野恵一

沖縄出身の両親の下、一九三六年に東京で生まれ、国民学校に入って絵に描いたような愛国少年のとして育ったという新崎盛暉は、私との対談で、「4・28」の思い出として以下のように語った。

「一九五二年四月に高校に入つて、四月二十八日に校長が全校教職員生徒を集めて、今日で日本は独立しましたということで、万歳三唱をしたんです。それが僕の沖縄との出会いだった。僕は沖縄出身だとは思つていても紛れもない日本人であつた。しかし、沖縄が日本から切り離されて米国の支配下に置き続けられるというのに、ここで万歳している奴がいるわけね。校長が音頭取つて、九九%くらいがこれに唱和するわけ。僕は、沖縄の人間であつたこともあるのだろうけど、対日平和条約によつて、沖縄が日本から法的に分離されるということは、明確に意識していたはずですよ。／そこで、これはいつたい何だ、沖縄は日本ではないのかという、かすかな疑問みたいなものが生じた。それほど明確ではなかつたかもしれないが、万歳している連中と僕との差というかな。しかし、万歳しなかつたのは僕だけではなかつた。高校三年生ぐらいのひとにぎりの人たち、社会科学研究班とか、時事問題研究班の連中もそうだった。彼らは破防法反対などの運動をしていた。／僕は右翼的信条を捨てているわけではなかつた。弁論班に入つて、第一回の弁論大会が六月にあつた。僕の演題は『日本の真の独立への道』だった。沖縄を切り捨て、そして独立したといつては、右翼的な論理を貫きからん、いつたい何事か、というわけです。そこでは沖縄も千島もほぼ同じにとらえているわけですね。こんなことでいいのかという、右翼的な論理を貫徹して『日本の真の独立への道』という演説をしたんです」(『本当に戦争がしたいの!?』凱風社、一九九九年、傍点は引用者)。

さて、安倍晋三政権は、民間天皇主義右翼団体がこの間主張してきた「主権回復の日」としてこの四月二十八日を祝うという政策を、三月一二日に閣議決定し、選挙公約通り、国家行事化した。それは、天皇・皇后も出席する政府主権の式典であるという。都道府県知事にも招待状が出され、あらためて新しい米軍基地を辺野古へつくることを強制されている(埋め立て許可を申請している相手である)仲井真・沖縄県知事も招待されている。『東京新聞』(三月一九日)は、この式典の浮上は、沖縄の人々にとつて「本土(ヤマト)」に「捨て石」として使

われ続けている、「復帰50年」の今、新たに「屈辱」の日という感覚が再燃させているとレポートしている。もちろん安倍政権は、「いつたいなんなんだ」と思つたかつての新崎少年のように、米軍占領からの「真の独立」をめざし、米軍をおいはらい「強い日本」を「取りもどす」ために祝うというナシヨナリストとしての筋を通そうとしていくわけですらない。もしそうなら長く長く続いている米軍基地支配を終わらせ、日米安保条約を破棄するしかないからである。しかし、この天皇主義者の首相が実際に行つてゐることは真反対である。

『産経新聞』(三月二三日「主張」)は、こう主張している。
「安倍首相は『奄美、小笠原、沖縄が一定期間、わが国の施政権の外に置かれた苦難の歴史を忘れてはならない』と述べた。特に、沖縄は潜在主権が残されたといえ、講和条約発効後も20年間、米国の施政権下に置かれた。戦争末期の地上戦で多くの県民が戦死した事実と合わせ、国民が記憶にとどめておくべき歴史だ」。

私たちが忘れてはいけないのは、かつて天皇たちによつて沖縄戦に狩り出された沖縄の人々が、日米安保条約とセットで結ばれたサンフランシスコ講和条約によつて、天皇ヒロヒトの政治的メッセージを採用したアメリカの支配者たちによつて、「潜在主権」を日本に残すという論理で、米軍に売り渡された事実である。そして米軍基地づけの沖縄の人々の恐るべき「苦難」は、施政権が戻されるまでの二〇年間だけでなく、四〇年後の今日まで深まることはあれ、まったくなくなつていない事実である。このことに歴史的責任のある保守政権のエースの天皇主義者の安倍たちのいう「主権」とは何であり、何を「祝う」というのか。どういふ歴史意識の書き直し(偽造)を、この式典を通して実現しようとしてゐるのか。

六〇年安保五〇年の二〇一〇年から、「4・28」を政治焦点化して運動をつくつてきた私たちは、三年後の今年、沖縄の地で反基地・反安保の運動を担い続けている新崎盛暉さんに来ていただき、彼の問題提起を受けながら、この問題を集中的に論議する集まりを持つ(反「昭和の日」実行委との共催)。結集を呼びかける。

(あまの・やすかず／反安保実)